

## 変転極まらない軍隊の生活

岐阜県 遠藤 金次

私は大正十二年二月生まれ、陸軍工廠にいたのですが、昭和十八年八月徴兵検査で第二種でしたので現役兵でなく、十九年三月に教育召集されて岐阜の中部第四部隊

の第八中隊に入隊したのです。主な教育は岐阜―犬山間の行軍で、毎日二時間ぐらいでした。上官から下士官志願をしろと言われましたが、兄、姉婿、従兄と三人死んだので断わり、五月十日ごろ召集解除になったのです。

ところが、十日後の五月二十日再召集で、同じ八中隊で同じ寝台、曹長も准尉も同じ人だった。南方要員だったが、中隊へ残されて動員室なので勤務していました。

一番困ったのは、当時既に兵器が少なくなり、近くの学校で学生が教練に使っていた小銃や帯剣を集め歩いたことです。最初の召集兵にその兵器を持たせたのですが、四国、九州間の海上輸送中に船が沈没したりで死んでし

まった。

今度は、うちの方も兵器がなくなり、三人に一銃、帯剣は竹で作ったもの、水筒も孟宗竹を筒切りにし、飯盒も代用品です。後には一銃で五人で、三個連隊で一個連隊分というわけです。隊にいる兵隊も負傷兵が多くて、敬礼も左手です。南方要員、戦地下番（戦地から戻ってきた兵隊）で、沿岸防備の部隊を編成する動員の手伝いをしたのです。

私は動員の仕事を終えて、中国行きとなったのです。下関―釜山、朝鮮海峡は状況が非常に悪く（敵の潜水艦が常に出没）、ジグザグ運航で、普通の四、五倍時間がかかりました。釜山の学校で宿泊したのですが、どこからともなく小石が飛んでくる、学校の窓硝子は破れるという治安不良で、「これはアカンな」と気付いたのです。満州―山海関經由で十九年八月徐州に着き、現地教育二か月でした。昼は演習、夜は鉄道線路警備でしたが、十月ごろ南京に向かって出発し、揚子江を遡航して、漢口の下流の大冶鉄山への勤務です。

それは、大冶の鉄鉱を日本の八幡製鉄所へ運ぶ、その

帰り船を利用して馬を輸送するのです。鉄鉸船の船底が深いので命懸けです。蹴る馬、食いつく馬、癖馬が多い、馬扱いに馴れぬ兵隊が多くて、怪我をする者が続出です。

私は農家で馬扱いは馴れていたもので、五頭、一〇頭つないで乗っていた。夜逃げる馬を朝つかまえるのに大苦労、ところで馬相があるので他から似た馬を一時借りて点呼に間に合わせたこともあった。

馬輸送中、P 51（米戦闘機）に襲われるので昼はかくれて、夜行動する。九江付近は河幅が狭くて急流なので航行に苦労したのですが、嘘のような本当の話があるのです。昼待機しているとき、馬のため蓋を刈るのだが、死体が出てくる。体が石灰で白く固まっていたよう、それを收容したら、愛知県の津島市の人で前年爆撃で死んだ人や岐阜の兵隊もいた、なんの因縁のような不思議なことです。

十一月、武昌に入り、長沙―広東という予定だったが、米軍のB 29重爆撃機などが、大挙して武昌、南京と揚子江沿岸の主要都市を猛爆撃をしたのです。

武昌では弾薬庫の爆薬が誘発し（二三年分の弾薬といわ

れていた）、我々は武器も何もなくなってしまったので、軍主力に追及できなくなってしまいました。

やむをえず、独立歩兵五〇七大隊（真鍋大隊長）要員となりました。十月、十一月なのに夏服で寒さ凌ぎに天突体操です。

その当時、孝感飛行場では爆弾逃避の方法を覚えましたが、双眼鏡で爆弾が自分の方向からそれていけば安心、自分の方に向かってきたら、ソレ大変と退避するのです。

各小隊ごとに自動車路の警備をしていたのですが、蒋介石軍・八路軍・新四軍と敵が混じって、ゲリラにやられまして、夜になるとチェッコ銃の射撃音があるので寝ずの警備です。私の所には二十何本も暴標が立っていました。

八路軍の規律は正しくて支那人は大事にしていました。そのころから八路軍は宣撫していたのでしょうか。

終戦で湯池へ集結して復員事務をしたり、帰ってくるときには糧秣の係をしたりしました。輸送列車を銭を出さないと発車させないことが、どこでもあった。その時、各隊の兵隊から金を集めたり、予め準備していた毛布を

渡してやっと動かすことができました。

敗戦、弱身に付け込む中国軍掌や停車場係、私は腹を据えかね經理将校と一緒に、上海の管理官にこのことをぶちまけた。すると、早速手を回して、毛布は返らなかつたが、お金は返ってきた。こちらはその金で牛の缶詰を買って皆に分けた。

上陸した港で、切符と二〇〇円だけをもらって下呂へ帰ったが、岐阜で腹が空いたので、その牛缶を食べていたら人が集まってきた。内地も随分食糧がなくて、牛缶が珍しかったのでしょう。下呂へ帰り着いたのが五月ごろなので、桑畑の緑、喜んで駅近くの祖母に挨拶にいったら死んでいた。親戚の年寄りも二人死んでいた。わずかに三年の間に日本も変わった、家族も変わった、復員の喜びも悲しみに一変してしまいました。

## 砲兵第百四連隊（鳳）

湘桂作戦・馬・マラリヤ

静岡県 河野 政信

私は大正十一年生まれ、昭和十七年徴集で、十八年に入営しました。所属したのは第百四師団の野砲百四連隊で、広東の西江岸の三水県に駐屯して、歩兵第百八連隊に一個中隊配属され、山砲二門です。

古參兵は関西の人たちでした。大東亜戦で香港攻略の時、現役の少年兵が、佐野部隊（第三十八師団一沼）へ転属したので、その欠員名古屋師団補充の兵隊が鳳兵団へ入ったと聞いていました。だから、十七年ごろから、愛知・岐阜・静岡の人が主力になったのです。

苦勞というく、私たちは恐らく一番でしょう。馬に砲に、それに弾薬があった。食糧・馬糧もあったでしょう。恐らく空襲の時には駄馬。山また山なので鞍馬ではできない。